



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	奥谷浩一『哲学的人間学の系譜ーシェーラー、プレスナー、ゲーレンの人間論ー』（梓出版社、二〇〇四年）
Author(s)	今井, 道夫
Description	書評
Citation	哲学, 43, 77-83
Issue Date	2007-07-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35045
Type	departmental bulletin paper
File Information	43_RP77-83.pdf



《書評》

奥谷 浩一『哲学的人間学の系譜

——シェーラー、プレスナー、ゲーレンの人間論——』

（梓出版社、二〇〇四年）

今井 道夫

人間学という名称は魅力的である。人間とは何かを直接、問うもののように見える。哲学史のうえでは、カントに人間学についての著作がある。とはいえ、『実用的見地における人間学』（一七九八年）と題されたこの著作は、カントみずから応用哲学として、哲学の原理的領域の脇に位置づけた。二十世紀になり、生物学その他の諸科学による人間研究を受容し、また対決しながら、哲学の原理論としてあらためて人間学が構想された。それは哲学的人間学として構想された。代表者としてマックス・シェーラー（一八七四—一九二八）、ヘルムート・プレスナー（一八九二—一九八五）、アルノルト・ゲーレン（一九〇四—一九七六）がいる。本書はこの三人を取り上げ、批判的に検討している。人間学の原語である *Anthropologie* は、今日では「人類学」としてむしろ人気があり、種々のフィールドワークをおして人々の注目を集めている。しかし、そこから得られる知見を追っていても肝腎の人間の本质が見えないものどかしさがある。より哲学的に詰めた人間論はありえないのか。そう考えたときに、ドイツの哲学界で形成されてきた哲学的人間学に、なんらかの手がかりを見出せないかと期待したくなる。

奥谷浩一氏はこの大著をまとめるにあたって、まずゲーレンに取り組み、つづいてプレスナーへと進んだ。すなわち、一九八七年から九二年にかけてのゲーレンにかなする紀要論文、一九九九年から二〇〇四年にかけてのプレスナーにかなする紀要論文がそれぞれ第三部「アルノルト・ゲーレンの人間論」、第二部「ヘルムート・プレスナーの人間論」の土台になっている。そして第一部「マックス・シェーラーの人間論」は本書のために書き下ろされたものである。以上に「序論」、そして「総括と展望」を加えて、本書が成り立っている。奥谷氏は序論で次のようにいう。ここで扱う哲学的人間学は人間研究や人間論一般を指すのではなく、「マックス・シェーラーを提唱者とし、人間の問題を哲学研究の中心課題として位置付けて、人間にかかわる個別諸科学の研究成果との接点を維持しながらも人間の本質問題を独自に哲学的に探究しようとしたひとつの哲学上のグループであり、シェーラーの後にヘルムート・プレスナーやアルノルト・ゲーレンなどの後継者たちによってさらに継承・発展させられていったひとつの哲学思想の潮流または学派を指し示す用語にはかならない。」(三一四頁) この系譜を検討するのが本書の目的ということになる。さて、気になるのは著者のこの「潮流または学派」に対する評価が必ずしも高くないことである。「『哲学的人間学』が人間の本质と本質構造をめぐる諸問題の解決にはたして成功したのかどうかを問われるならば、われわれは残念ながらこの問いにたいしては否定的に答えざるをえない。」(二二頁) この哲学的人間学が今なお有力であるならば、これを批判的にたどることは意義あることであろう。しかし、消えかかっているこの系譜を掘り起こして批判することは、なにか死者、ないしは死にかかっている人を鞭打つような感が否めない。私は冒頭で哲学的人間学に対する期待を述べた。ここで、多少の戸惑いをおぼえざるをえない。とはいえ、本書は十分に読むに値するものであり、以下でその叙述を追ってゆこう。哲学的人間学の評価をめぐる問題はあとであらためて取り上げる。

第一部ではシェーラーの人間論が検討される。主として彼の『宇宙における人間の地位』(一九二八年)が対象とされる。シェーラーによると生命あるものは心的能力を有する。それは感受衝迫という下位の段階から、本能、連合

的記憶、実践的知能へとレベルをあげてゆく。感受衝迫は植物的段階であり、本能から動物的段階に入り、順次、高等動物へと進む。人間だけではなく大型類人猿も実践的知能をもっている。それでは人間を他の生物から切り離して特徴づけるものはなにかというと、それらを超えた精神である。そしてこの精神の根本をなしているのは、衝動と環境世界から自由である世界開放性であるとされる。この精神は理念化という働きをもっており、それにより経験の限界を超えて事物の本質認識を得ることができ、精神はしかし、感受衝迫などの原理である生命に対して無力である。とはいえ人間は精神と衝迫との邂逅点であり、そこにおいて自己実現がめざされるのであり、また神生成の場ともなる。精神の基底にあるものが人格として捉え直されるが、奥谷氏によればその人格論は十分に展開されているとは言い難い。

第二部はプレスナーの人間論についてである。『有機的なものの諸段階と人間。哲学的人間学入門』（一九二八年）が主として検討される。プレスナーはデカルト的な二元論を、あるいは機械論と生気論の対立を超え、しかも形而上学に入り込むことなく考察を進める。プレスナーは境界という概念を提示する。それは事物の有限性に基づく空間的な限界である。そのうえで、その境界の外のものとかかわるかという問題があり、そのかわり方が類型化される。有機的生命にあつては、生体膜がこの境界を画しており、それを介して周辺領野に対してなんらかの位置を取ることになる。その際の位置的性格、すなわち「位置性」が問われることになる。有機的生命は周囲の環境世界、プレスナーの用語では位置領野と接触しながら生命を維持する。そのように有機的生命と位置領野が交差する場が生命圏である。植物の位置性についていうと、その諸部分はまだ自立的で個性性はまだ実現していない。そして植物は周辺領野にたいして開放的な位置形式を取っている、つまり周辺領野におのれを委ねている。これに対し動物は肉体とその諸器官を周辺領野から閉鎖的に遮断して、それらを統合する中枢神経を発達させ、それとともに感覚・運動能力を高める。植物にも素朴な意味では自己が存在しているものの、肉体的諸器官を所有する自己が動物においてようやく

成立している。とはいえ動物にあつてはいまだへここー今に埋没している。プレスナーは動物にも意識を認めるものの、自分を体験することはできない、と言う。人間にあつてはじめてへここー今に距離を取るとともに、自身自身に対しても距離を取ることができる。人間はそれゆえ、自分の背後に到達した生き物ということが出来るが、それをプレスナーは「脱中心性」という概念で表現する。人間には外部存在（周辺領野）と結合している肉体、肉体のかの内部存在、肉体の外の「眺望点」という三重のアスペクトの統一にあり、それが人格である。そして人間は脱中心性のゆえに、自然的な技巧性、媒介された無媒介性、ユートピア的な立場という三つの法則により、文化と歴史を創造することになる。

第三部はゲーレンの人間論についてである。主として扱われるのは、『人間。その本性および世界における地位』（一九四〇年、一九五〇年第四版「大幅に加筆修正」）である。シェーラーの人間学を引継ぎながらもシェーラーの精神の形而上学を取らず、経験世界にとどまろうとしている。ゲーレンはヘルダーにならない人間を「欠陥生物」として規定する。人間は動物と違い、特殊な自然環境に適応して器官や本能図式を特殊化することはなかった。進化からはずれてしまったといえるが、他方で特殊な環境世界とつながることはなく、世界に対して開放的である。かくして人間は行為により、みずからの欠陥を埋め合わせてゆく。あるいは欠陥によりふりかかる負担を軽減する。行為は予見と計画に基づいて現実を変更する。そこに人間の文化が成立する。人間は自然環境への適応性が欠けているとはいえ、適応可能性をもつ。すなわち可塑的である。人間の自己活動性により、可塑性がふさわしい指導秩序を可能にする。奥谷氏はさらに動物と人間とのあいだの比較心理学的問題、つづいて言語の問題にかかわるゲーレンの哲学を批判的に検討してゆく。その際に注意すべきなのは、ゲーレンが知性を正面から取り上げておらず、それを正當に位置づけていないことである。

以上、奥谷氏による要約を、哲学的人間学に暗い私がさらに要約した心もとなひながら、シェーラー、プレス

ナ、ゲーレンの議論の一端を紹介してみた。二十世紀に入って人間にかんする個別的諸科学が飛躍的に発展したため、高度な専門分化・細分化が進み、人間の全体像が失われてゆくことへの危機意識が哲学的人間学の根底にあったと奥谷氏を見る。そして『『哲学的人間学』の人間把握の試みは、人間の本質問題にたいして哲学の側から接近する総合の試みのひとつの模範としてこれからも存在し続けるであろう』（二八八頁）という。しかしながら、その試みが成功したかという、否定せざるをえないというのが奥谷氏の立場である。その理由を最後の「総括と展望」において、六項目にまとめている。要約すると次のとおりである。

- 一 哲学優位の立場を保持しつづけていて、哲学と科学のあいだの断層を埋めることができなかったこと。
- 二 このことの直接の帰結として、進化論に対して懐疑的または拒否的態度を取ったこと。
- 三 これに関連して、動物と人間との本質的差異という哲学的先入見に固執したこと。
- 四 動物と人間との質的断絶という見方と関連して、人間は環境世界とは区別された「世界」をもち、世界に解放された自由な存在であるとする見方を取る。これにより人間の自然的被規定性および社会的規定性を軽視してしまったこと。
- 五 人間還元主義または人間学主義という傾向がある。ある時代の社会的在り方から規定されるべきことを、固定化された人間の本质から説明しようとしている。
- 六 生の哲学を受け入れ、西欧の人間観を革新しようとしたものの、西欧の伝統的人間中心主義を脱することができなかった。

奥谷氏の哲学的人間学批判において、それが科学、特に生物学的科学を踏まえながらも、結局、科学と哲学の融合

に失敗しているというのが大きなポイントとなっており、本書中で繰り返しいわれている。そしてとりわけ進化論の成果に背を向けていることを批判する。確かに進化論は人間と動物の垣根を取り払う見方をもたらし、それが哲学や宗教にもたらした衝撃は大きく、また重要である。とはいえ、それをくぐり抜けて、あらためて人間の固有の地位を確立しようとする哲学的人間学の意図は、それほど見当外れとはいえない。奥谷氏のいうように、科学の発展の成果を取り込むことはだいじである。動物心理学は、二十世紀初頭のケーラーの類人猿の知能試験から、今日ではチンパンジー「アイ」の知能試験が話題になっている。確かに興味深いものの、だからといってその成果が一々、我々の人間観をあらためるほどのものとは思えない。現代生物学の成果を積極的に取り入れよというのなら、E・O・ウィルソンのような人間論を展開すればよいのだろうか。いやそれは生物主義に堕しており、哲学的により正統な原理に基づいていかなければならないというのが奥谷氏の見解かもしれない。奥谷氏の哲学的人間学批判で私がつとも納得できたのは、右の項目の最後の第六項である。確かに、哲学的人間学に期待しつつその議論を追ってみて、物足りなさが残るのはこの点に極まるのではないかと思われる。その意味では奥谷氏とともに、哲学的人間学を否定的に見ざるをえない。

にもかかわらず、哲学的人間学から我々は何を学び取ることができるのかということについて最後に考えてみたい。本書中にプレスナーの著作『笑いと泣き』が引かれている。この派の哲学者たちはそれぞれ、すぐれた人間探究の書を遺していることが知られている。奥谷氏がいうような理論的基盤の破綻という問題を抱えているにしても、この面ではなお、学ぶべきところがあるのではないだろうか。次に、奥谷氏自身があげているように環境思想ないし環境倫理学とのつながりがある。限界があるにしても生態系の問題に哲学的人間学はかなり踏み込んでいる。もうひとつあげておくとすれば、本書ではふれられていないヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカーらの医学的人間学である。同じ人間学ということばをつかっているのは偶然ではなく、連関がある。こちらにも視野を広げるなら、哲学的

人間学は生命倫理学に対しても影響力をもちうるような気がする。

取り上げられている三人の哲学者のうち、奥谷氏はプレスナーにいちばん好意的であるように見えた。私も読んでいてプレスナーのところがつとも興味深かった。本書によると奥谷氏は『有機的なものの諸段階と人間。哲学的人間学入門』の翻訳出版を準備中とのことであり、期待したい。そしてそれ以上に、ヘーゲルやマルクスの研究を重ね、現代の生物学や心理学の文献も渉猟しておられる奥谷氏自身の哲学的人間学の展開を期待したい。